

『似笑顔』

いじめられっ子の君に「いつも濁った笑顔だね」って。そんなことを言われても仕方がなかった。

僕が見せる笑みは誰にでも通用する、まがいものの似笑顔だ。不幸だったのは、それがまわりには評判が良かったということだろう。みんな、ただ相槌を打ってくれる都合の良い人形に満足していた。

自業自得でもある。怖かったのだ。話していて嫌な素振りを一度でも見せられたら、山奥まで走って行ってしまうそうなら良かった。大げさじゃない。

これは、勇気のない自分への罰だ。僕はこのまま一生、誰にも本当の部分を見せることなく、負の想像に怯えながら消えていく。

そう思っていたところに、君は現れた。

「ねえ、無地のパンつて、ずっと食べてたら飽きない？」

ふと、囲まれる人気を避けたかったとき。初めて君が話しかけてきたのは、ひよんな事柄だった。どうしてそこが引かなかったのだろう。それに普通、初対面はそれなりの疑心と緊張をもって、最低でも敬語からのはずだ。違うかな？ 僕はそうしている。

君は、はつきりものを言いすぎる。そのくせ真意は大体テキトウで突然で……。だからまわりには、君を好ましく思わない人ばかりだった。

でもね、そんな君だったから勇気をもらったんだ。評判の良い僕の似笑顔を指摘されたときは驚いたけれど、あとに言ってくれた「私は何とも思わないから素直に笑ってよ」という言葉に、どれだけ救ってもらったか知らないだろう。僕は知っているよ。いつもテキトウに明るくニコニコしている君の顔が真剣になったのを。

それから、わかったことがある。よく見れば、僕だけじゃなかったこと。みんなもどこかで似笑顔を作っていた。みんなも怖かったんだと、気づけたんだ。

あと、僕は君が羨ましくて、かっこいいと思っていた。何にも左右されない。うん、いじめられる怖さに飛び込ながら、まっすぐにいられる君の強さが、本物だったから。乗り越えた先で君のようになれるなら、僕も頑張りたい。見てて。

「ごめん、そういうの好きじゃないんだ」

不器用でもちゃんとできているかな、笑顔。

似笑顔

2025 年 4 月 1 日 執筆

著 者 やさかれい
八坂 零

掲 載 芸術の星座
